

いて、イタリア語のソネットを読み、ヴィリギュウスの読書会をやっているから、まさにあれこれの本を読んでいる。そのうちに見事な花を咲かすだろう。

最後に、日本語の詩を読むときでも、初歩的な外国語の知識があれば判り易いという例を三好達治から挙げておこう。『英語青年』にニュー・クリチズムについて書いたとき、枕として述べたことがあるが、詩集『測量船』の中に、「郷愁」という次に掲げる作品がある。散文詩というよりも、短篇小说の断片のような気もする、一寸謎めいたところのある小品である。

蝶のような私の郷愁ノ……。蝶はいくつか籠を越え、午後の街角に海を見る……。私は壁に海を聴く……。私は本を閉じる。私は壁に凭れる。隣の部屋で2時が打つ。「海、遠い海よ」と私は紙にしたためる。— 海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がいる。そして母よ、佛蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。」

(仮名使いおよび省略は原文のまま)

達治には別の詩「乳母車」や「笹」にみられるように母への思慕が深い。この作品でもなんとなくそのことが判るが、この点をもう少し明確にしてみる。彼が結びのところで述べている「佛蘭西人の言葉で

は、あなたの中に海がある。」とは母(mère(mɛ:r))と海が“pun”をつくっていることの暗示だろう。(達治はフランス文学を専攻し、大量の翻訳をした時期があることを思い出しておこう。)そして海は生命を胚胎し、母の胎内という内なる海もその機能を有している。また詩人がいうように、漢字の海には母が隠れている。こうして、母と海は等符号で結ばれている。次に「壁に海を聴く」という表現を考えてみると、壁(mur(my:r))からは確かに海(mer)の響が聞えてくる。そうすると、次の等式が成立していたことになる。母=海、海=壁であり、故に母=壁となる。すると詩人のいう「私は壁に凭れる」という表現は、母=壁であるから、「私は母に凭れる」ことであり、達治の郷愁の根元にたどりつくのである。

自分のことを臆面もなく語って、しかも直接は文学についてだったが、理科系や社会科学系の学問についても、これによく似たことがあるのではないかと思っている。「いつも念頭においておれば」資料なり、本などが「向うから勝手に歩いて来てくれる」という点と、一見全く無関係と思われていたことが意外に磁力を発揮して一つの体系として連なるという眼を見張らせる成果への期待である。

自由投稿

「投稿子」雑感

社会文化コース・4年 大西五己

その1

これが我が在学中の最後の投稿となる。私が初めて投稿したのは『「夜ふけて思うこと」— 医療に関する若干の考察 —』(No.9, 1978年7月5日)であった。以下「現代のヴァンダリズム」(No.10, 1978年10月31日), 「社会文化研究室」(No.11, 1979年2月10日, なおこれは自由投稿ではない), 「『私の問題意識』に対する私の問題意識」(No.12, 1979年3月24日), 「私にとってヨーロッパとは何か」(No.13, 1979年9月10日), 「再び『私にとってヨーロッパとは何か』」(No.14, 1980年1月10日)。いずれの場合でも、批判、中傷、評価とかの反応が少なかったため、結局自画自賛気味の投稿をくりかえしてきたが、できれば読者諸氏の批評を多く得て、時には「論争」の形で『飛翔』をうめたいと考えるが、いかんせん何と関心のうすいことか。『飛翔』は学部内広報誌として、教官、学生、事務から広く

意見を反映させ、学部内の諸問題を取りあげることなどして、学問の自由と大学の自治の象徴たる存在であるべきである。

以下『飛翔』とのかかわりをひもときつつ、4年間の雑感を述べてみたい。

その2

私が寄稿しはじめたのは、3年次からであるが、これには次の事情による。76年に入学した当時は、いわゆる総科の理想にもえて、文芸部、国際問題研究会、科学研究会と、タバコも麻雀も全く知らずに頑張ったが、これも2年になると活動停止、苦悩の日々にかわった。人間なのだから失敗もあるという言葉に甘えるわけにもいかず、結局自らの人生、その環境、人生観、世界観への再検討、内省を経て到達したのは、「人間としていかにあるべきか」という問いであった。人間は完璧でありえるわけではないが、少なくとも障害を克服しなければ何ら再生へ

の道は開かれない。かくして3年次から適当に遊びつつ、自分なりに努力してきたつもりである。3年末から社会文化学生図書委員会を組織して、研究室の管理、図書の購入を計ったが、就職戦線への突入とともに低滞した。ユニオンの経過についてはのちにふれる。

その3

「No.13」に寄稿した「私にとってヨーロッパとは何か」は、79年2月末から1ヶ月間ヨーロッパ（主にEC諸国）に旅行したことの「まとめ」的意味のものである。総費用50万、親などに迷惑をかけずにアルバイトと借金によって何とかこなしたが、やはり70万ぐらひは必要かもしれぬ。その旅行での裏話は「No.14」に載せてあるので御笑覧されたし。

6月には教育実習、7・8月は教職試験で東奔西走したが、準備不足のためかなり苦労した。しかし教職は私の唯一の志望なので、何とか広島にのこりたいと考えている。教職について少しのべるならば、昨今の事情から我が学部でも教職希望が多いが、私も含めてひとつの反省、希望がある。つまり教職科目はとるが、それ以外での教育的な議論なり、研究会なり行われてこなかったということである。教育実習期間中は、教授方法等についてはかなり進展しても、その基礎たるべき教育観なりが一切議論されないのははたしていいことだろうか。ましてや教師をめざさない学生が、楽しいからとか、ためになるとかの皮相的な気分で実習に行くこともその是非が討論される必要がある。しかしそれは教職希望を排除しているわけではなく、少なくとも教職をとるのであれば広範な教育論議をすべきだと思うのである。

その4

ここ1年間、社会文化コース学生ユニオンの活動をしてきたが、一部に私への批判があるときくのでその経過等の説明をしておかなければならないだろう。その2でふれたユニオンの原型は、学生図書委員会であったが、昨年春、学生の結合と研究室、図書の管理などの理由から学生委員会へ発展すべき旨、委員の選出をはかり執行部を構成した。一応3分の2以上の署名もあり、執行部で正式名称として「ユニオン」を決定した。かくして学生図書委員会の発展的解消を以てユニオンが成立したのである。しかしながら実質的活動もせず、そのやり方に批判が出て、執行部は結局最初からやり直すことになり「準備会」を結成するに至った。今にしておもえば私のやり方すなわち組織づくり、運動の仕方にはあやま

りの面もあったのは事実である。しかし實際上研究室・図書の管理をやらなければならなかったという事情も理解されたい。少なくともその意図にあやまりはなかったとおもう。それは「No.11」を見てもらえれば承知してもらえらるだろう。

研究室は、開かれていなければならないし、学生交流の“場”が確保されていなければならない。たしかにそれらは一個人の不満に端を発しているが、はたして個々の学生の要求・不満・問題意識に根ざさない運動があるだろうか。個々の具体例にふれる余裕をもたないが、一つだけあげるならば社会文化学生研究室は今や単なる研究室および演習室にかわっているのである。ゼミで使うため自由に使えないのである。いったい学生の自主性・創造性を保障せずして、大学の自治、学問の自由が守れるのだろうか。予算ひとつとっても、学生には輪転機やコピーは使わずなという。学生数に応じて予算配分がなされている筈ときく。いったい大学は三身一体ではなく、二身一体と主張しうるのである。学生が印刷機（つまり国費）を使うならばユニオンに教官が介入するといった主張はどこから出てくるのか。我々学生にもその用途には権利がある筈ではないか。某大学では卒論用のコピーは無料という。卒論用のコピー程費用のかさむものではなく、全くばかにはならない。全てのコピーを無料にと言っているのではなく、一部10円でもいい、何とか考慮してほしいと主張しているのである。もちろん最低限卒論用のコピーは全面的に認めてほしいと要求したいのである。

その5

さて、この原稿はようやく卒業論文が仕上がった時点でかいている。総頁数291（400字詰め）。我ながらおぞましい程の量である。おそらく今迄の最高頁数であろう。しかし多ければよいというわけではなく、質の方は保障しかねる。流石に二百頁を超える頃になると、いや気がさしてくるほどの状態になり、頼みの綱は量への挑戦のみということになり、結果は引用の多い愚作になってしまった。題して「マルクスにおける『大工業』理論の成立過程の一考察」。三章構成であるが、第二章第四節まで読んでもらえれば十分である。あるいは一章のみでもいいのではないかと思われる。題目からわかるように、その成立過程を跡づけること、つまり「ひとつのマルクス主義成立史研究」を試みたわけであるが、力量不足のため概説史・紹介史になってしまった。従って自分の分析能力、比較能力、構想力、文章力と

いった力(マハト)がいかに培ちかわれていないかということを感じてしまった。それは4年間勉強しなかったせいだ、おまえ自身の責任だと言われれば確かにそのとおりだが、それだけですまされぬ問題もあるのではないか。コースに進んでいったいどれだけの勉強をしえたのか。システムのものはほとんどないと言っても過言ではないのではないか。いろいろな研究会も組織されていないし(1・2ほどあるが)、学生の自主性、創造性を発揮しようような機構が形成されているといえるのか。4年生が3年生・2年生を指導したり、サブゼミをつくったり、意見を活発に出しうような雰囲気 genuinely 形成されているのか。就職が決まったからといって卒論なんて簡単にすまそうという意見すらあるではないか。私の卒論なんてたかがしれている。そんなことは周知のことだ、引用が多すぎる、視角がなっていない、などと批判がでるのは当然だし、否そのような状況から卒論の在り方なりが議論されるべきであろう。提出したからめでたしめでたしですまされるかどうか。全く自分とかわかっていなければ無意味だし、私自身製作上の欠陥を克服しなければならぬと考えている。設備とか機構とかいろいろと要求してゆくとともに、学生自身現状に甘んぜず、自らの立場

広島大学総合科学部報『飛翔』No.15
を認識し、ユニオンに参加して実りある大学生活をすべきである。研究会を組織して討論し、教養ある大学人たらんとすべきではないか。自戒とともに後輩諸氏の自覚を喚起したい次第である。

その6

いずれにせよとうとう卒業である。この4年間のいろいろなことがあった。やるべきこともたくさんあった。それらのことを忘れることなく、常に自らの連関において考察し、批判し、書きつづけていきたい。学部には不満もあったが、人生の4年間をここで過ごせてよかったとおもう。何故なら自ら望んできたし、自己の個性化・思想化をなしたからである。なお卒論製作にあたり、社会文化コースの教官方に大変お世話になり、また図書室の事務官方にはいろいろと便宜を計っていただき、まことにありがとうございました。それから両親に感謝したい。経済的困窮にもかかわらず、「はなとっこん」(方言)の覚悟で大学を出してくれて本当に感謝に耐えません。恐縮ながら紙面を利用させてもらったが、最後に総合科学部の繁栄と『飛翔』の発展を願ってやみません。今後は総科OBつまり『飛翔』OBとして半永久的に寄稿したいが、いかがなものだろうか。

自由投稿

「韓国を訪ねて」

用度係 大谷 浩一

1980年1月2日 ソウル金浦空港

1980年1月2日、ソウル金浦空港に到着しました。正月休みを利用して、韓国の旅を選んだのは、日本に一番近い外国で、歴史的に深いつながりを持っているということに、興味をいだいたからです。

大韓民国

韓国国際観光公社の発行による、案内書より、簡単な紹介をしてみたいと思います。

「国号は大韓民国。1948年8月に政府樹立。国連によって韓半島における唯一の合法国家に承認された。「韓」の由来は遠く三韓時代(弁韓・馬韓・辰韓)にまで遡るとされています。

韓国はアジア大陸の北東部から日本列島に向かって突き出し、東西両側(東海・西海)および南(大

韓海峡)の三面が海に囲まれた半島国家です。北緯33°線は日本の佐渡ヶ島をよぎり、福島・仙台の間を走っています。韓半島の南端済州島の南と九州の佐世保がほぼ同じ緯度にあります。韓半島の最長部の長さは約1000キロメートル。総面積は約22万平方キロ。国土分断により、現在、統治権の及ぶ範囲は98477平方キロ。人口3701万人(78年度現在)となっています。

大陸性気候と海洋性気候のはほぼ中間にあり、温帯に属するので、四季の移り変りがあざやかです。

1年を通じて暑さのピークは7・8月、その逆が12・1月と規則正しい。夏は、湿度が低く、冬は韓国独特の“三寒四温”の為にしのぎやすい。梅雨入りは7月、8月に入れば梅雨明けとなり、秋の爽やかさは定評があります。指を突き上げれば青に染まりそうな蒼

く澄みきった空の青天が続く秋には紅葉狩りの楽しさが満喫できます。」と案内しています。



(ソウル市外の建築中のアパート)

1月2日 韓式旅館 晴 -4度

ソウルでの宿泊は、M先生に紹介して頂いた、昌徳宮近くの韓式旅館(ハンシクヨーガン)に宿をとりました。1泊2400ウオン(2ウオンが1円、1200円程度、食事別)で、6畳程の室内は、オンドルの為にあたたかく、家具調度品はすべてらでんで細工がしてあり、書画等もなかなかりっぱです。ソウルでは老舗のこの宿で4日間、快適に過ごしました。

観光は、日程の都合で多くは出来ませんでした。市内の散歩にはゆったりと時間をとりました。戒厳令下のソウル市内は、旅行者には、あまり緊迫した空気が感じられず、市民は平静そのもので、日本における報道の偏向を思いました。

中心地明洞には、正月の買物をする人々や若者が集り、とてもにぎやかです。インベーダハウスも大繁盛していました。ウインドショッピングをしていると、買わなくてもいいから見て下さいと店内に招きいられました。人参茶をごちそうになりながら品物を見せられると、買わずにいられなくなるのが人情で、そこをうまくついています。彼女達の愛想のよいことについては、自分の収入に結びついているとはいうものの、サービスとは何かを考えさせられました。私の貧弱な韓国語にくらべ、彼女達の日本語会話能力は大変なものです。(私の会話練習に協力してくれて、ありがとう。)

1月3日 曇 -6度 板門店(パン・ムン・チオム)

板門店はソウル北方約60km北緯38°線の南方5km、ソウル市内からはバスで1時間30分で南と北をさえ

広島大学総合科学部報『飛翔』No.15
ぎる南北の幅4km、非武装地帯の真中の軍事停戦会議場のある所です。板門店は昔はその存在すら余り知られていない小さな農村にすぎませんでした。それが南北分断に始まり、1950年から3年間にわたって続けられた朝鮮動乱の停戦協定が、ここで調印



韓国側の自由の家より写す。
北面の建物 北朝鮮側の板門閣
左手前 軍事停戦会議場

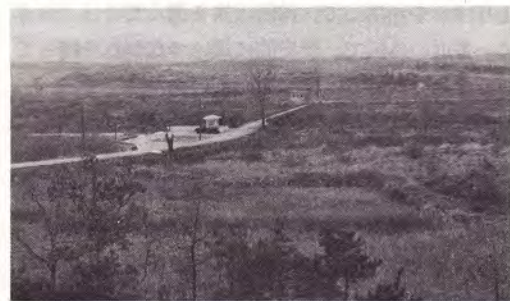
国連軍兵士が警備している。

されてから一躍クローズアップされて来たのです。

非武装地帯のちょうど真中に位置し常に国連側と北朝鮮側が軍事停戦委員会を通じて対峙していますが、今もなお近代における最も長い休戦が続いているのです。

板門店は、1970年朴正熙大統領の提唱により南北が、この小さな窓口を通じて再統一の話し合いを始めてから、さらに世界の目をくぎづけにして再びフラッシュを浴び始めました。

現在は、1980年1月18日韓国の崔圭夏大統領が、年頭記者会見において、先に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)が南北対話再開呼びかけの書簡を韓国側に送付したことについて「この問題を積極的な姿勢で検討するよう関係当局に指示した。」と述べ南



帰らざる橋

この橋により分断。2Km北方に北朝鮮の村がある。

中央のポプラは1976年8月18日事件の発端となったもの。

北首相会談に応じる構えをみせました。

(板門店訪問の留意事項は下記のとおりです。)

1. 板門店の訪問客は必ずパスポートを携帯する。
2. 観光中は訪問客の安全の為にガイド及び国連司令部警備兵の指示に従い行動を共にして下さい。
3. 訪問客は適切な服装を要し、下記のようなものは禁じられます。
Gパン、Tシャツのまま、半ズボン、サンダル、ミリタリースタイル、男性の長髪又は整髪されていないヘヤースタイル、ミニスカート、露出の多い女性服等、その他共同警備区域(JSA)・米軍支援団(ADVANCE CAMP)司令官が許可しない服装。
4. 自由の橋と板門店の間は写真撮影が禁じられています。但し、JSA内では撮影は自由です。内では撮影は自由です。
5. 板門店会議場の北朝鮮側施設や器物、特に旗やマイク等に触れてはなりません。
6. 板門店内にては北朝鮮側に如何なる行動即ち、北朝鮮側の兵士に話しかけることや笑顔を送ること、又は、手を振るゼスチャーは一切禁じられています。

なお、板門店訪問に際して、生命保障は万全をきすけれども、万一の有事を考慮して誓約書に署名をして見学をしました。この訪問は1月3日火大韓旅行社の板門店ツアーに参加したものです。ちなみに料金は8650ウォンで昼食は将校用の食堂で食べました。(あまり緊迫感は見られず)

1月4日 晴 -7度
ソウル大学校
東国大学校

1月5日 晴 -8度 民俗村(ミンゾク・チョン)
民俗村 (文化遺産の保存方法の一形態)
ソウルの南42kmの京釜ハイウェイ水原のインターチェンジを抜けてわずか3kmの所に、朝鮮王朝500年の庶民の歴史と生活、風俗慣習と生業をそのものずばりと再現させた文字通りの民俗の里があります。鍛冶屋、漢方薬屋、もち屋、居酒屋、巫女の家、易者の家、書堂(寺子屋)、手織り・機織りの家、農家、大富農家、寺、漁夫の家など各地方別に区分して、およそ科学と機械文明が入る以前の、あらゆる生活がここにあります。

案内説明によれば、「5千年の悠久な歴史を持っ

た韓民族の、独創的伝統文化と、固有伝来の風習等を、長らく継承保存する為に造られたこの民俗村は、約23万坪の台地に、230余棟の大小の建物が、ローカルな特色までこまかく生かされながら、昔の面影がそのままに再現されている。

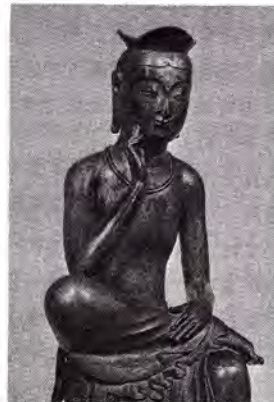


(民族村の民家)

彼等祖先が生活の中で表現している才気や技能が歴然と表われている民俗工芸品や、各種家具類が陳列され、これらの展示品を通じて、目ざめ始める此国の若者らは当然の事、此国を訪れる外国の人々にも、久しき文化民族の真面目さを見学させ、合わせて其の粋を味あわせればとの願で、建てた民俗展示場である。」と書いています。

元祖弥勒菩薩について

金銅弥勒菩薩半跏思惟像 三国時代(7世紀前半)についての美術案内を要約してみれば、「これは三国時代(B.C 1世紀頃~676年)の仏教美術の精随であるばかりでなく広隆寺の半跏思惟像(京都・国宝第1号)の原型だという。ところが広隆寺にある石碑には、「聖徳太子が秦始皇帝の末孫秦河勝に尊像を受け…」



島から渡って来た所謂「渡来人」の氏寺であり、カール・ヤスパースが「人類の求道像の極限の表

元祖弥勒菩薩
(金銅弥勒菩薩半跏思惟像)